画はおおよその期日で立てる。

以上の二つの点、すなわち、①中国が直接で明瞭、機能優先の「キャッチボール」式交流を採用しているのに対して、日本が間接で曖昧、情緒優先の「ドッジボール」式交流を採用しているという点、②日本人が完璧にこだわりすぎるのにたいして、中国では“計画追不上変化”「計画は永遠に変化に追いつかない」という考えが主流であるという点、すなわち、日本人と中国人とでは時間感覚において、大きく異なるという 2 点があげられるのである。

日本人にとって、プライベートであれ、ビジネスであれ、会う前に事前に約束することが必要である。多くの在日中国人が懐かしく思う故郷の習慣の一つとして、事前に約束なく友人の自宅に訪れることができるというものが挙げられる。日本人からすれば、突然の訪問は失礼なことだが、中国人からすれば、友人関係であれば、事前に遂一約束することは逆に疎遠な感覚を与える。また、上海の日系企業は、予定時刻よりも早く着き、予約なしで突然訪れる中国人のビジネスパートナーに困ってしまうケースもよくあるということである。日本が長期計画（年間計画）に対して、中国が短期計画である。日本で生活していくうえで、仕事上であれば、多くの年間行事は年度の初めに決められ、発表される。プライベートであれば、お店は予約制であり、友達との遊びでも事前に日程を合わせなければならない。日本人は皆、計画されたカレンダー通りに動く。それに対して、中国人は臨機応変な対応の方をより好んでいる。

前述したように、日本と中国は文化的に多様な面において異なる。飲食文化の違い、交通文化の違い、書き式文化の違いなどから生じた問題は、避けるか教えてもらうかで短期間で解決できる。しかし、時間感覚の違いによる問題はそう簡単には解決できない。また、生活のあらゆる方面に影響を及ぼしているため、日本で生活していく上で、どうしても避けられない問題である。中国の時間感覚から日本の時間感覚へ自らの時間感覚を変えることは、来日した中国人が日本社会へ適応するに際して、大きな問題となり得ると考えられる。

小括

第 1 章では、中国の留学事情および中国人の日本社会への適応における主要な障壁について説明した。地理、経済、日本政府が実施した「留学生 30 万人計画」、安全性と利便性、円安などの要因により、日本は中国人の主要な留学先の一つとなっている。また、日本においても、留学生と外国人被雇用者の国籍別内訳では、中国人が最も多い。少子高齢化、クローバル化により、これからの日本社会には中国人は増え続けると予想される中、彼らの日本社会への適応問題は殊に重要なものとなってくる。しかし、多くの中国人にとって、日本社会へ適応する際には、日本語という第一の壁以外に、日本文化という第二の壁が存在する。文化の中でも、時間感覚における日中の文化的違いが顕著なものとなる。また、多くの在日中国人にとっても難問となっている。

第 2 章　第 2 次社会化論としての準拠集団論

第 1 節　社会化のバリエーション

社会化とは、一般的に「無力な存在の幼児が、他の人間との接触を通して、徐々に自己自覚し、理解力をもった人間になり、所与の文化の習わしに習熟するようになる過程」を指す（Giddens　1993=1993: 91)。精神分析学の分野においてはフロイト（Sigmund Freud）が、心理学の分野においてはピアジェ（Jean Piaget）が、そして社会心理学の分野においてはミード (George Herbert Mead) が、この概念の主要な理論家として挙げられる (Giddens 1993=1993: 91-92)。

社会化は、大別して「第 1 次社会化」と「第 2 次社会化」に分けられる (Giddens 2001=2004: 51)。前者の社会化は、主として「幼児期と児童期」に行われ、「文化の習得が最も集中」する時期である。それに対して後者の社会化は、「児童期後半から成熟期に入る頃」に生じる。それぞれの社会化において「社会化の担い手」が異なる。社会化の担い手とは、「社会化の重要な過程が生ずる集団ないしは社会的脈絡」を指す。第 1 次社会化においては、主として家族がそれを担い、第 2 次社会化においては、「担い手」に家族が含まれるものの、その主たる担い手は、「学校や同輩集団、さまざまな組織体、メディア、それに最後は職場」に引き継がれる。第 1 次社会化において「後の学習の基盤となる言語と基本的な行動様式」が習得され、第 2 次社会化において、「自らの文化を構成する価値や規範の習得」が促進される。社会化によって、人間は「自己開発をおこない、自分の潜在能力を高め、学習を積み、環境に適応する」ことが可能となる（Giddens 2001=2004: 51)。当初、「社会化」という概念は、家族における子供の人格形成を想定した概念として作られていたが、「人間は一生をつうじて社会化しつづける」存在であることが認識されるにつれて、職業的社会化であるとか政治的社会化などの概念が、第 2 次社会化のサブカテゴリーとして作られるようになった（富永 1995: 103-104)。

社会学における社会化論は大別して、「機能主義的社会化論」と「相互作用論的社会化論」に分けられる（柴野 1995: 7-16)。前者は「規範的パラダイム」に基づいて作られ、後者は「解釈的パラダイム」に基づいて作られている。前者が「人間を被形成的存在とみなす分析視角」を優先し、社会化を「社会的要請に対応する従属過程」と捉えているのに対し（柴野 1995: 9)、後者の社会化論においては、人間による「解釈過程」の媒介が重視されている（柴野　1995: 13)。前者の社会化論において人間とは、社会から価値や規範を一方的に埋め込まれる受動的な存在と捉えられているのに対して、後者の社会化論においては、人間は、自らの環境的に適応するために、積極的かつ選択的に価値や規範を自らのうちに取り込み、それらを必要に応じて再構成する存在であると捉えられている（船津 1995)。

機能主義的社会化ないしは規範的パラダイムの社会化は、主としてパーソンズ（Talcott Parsons）を代表とする構造―機能主義によって展開された。相互作用論的社会化ないしは解釈的パラダイムの社会化は、一般に「意味学派」として括られる、現象学的社会学、シ

ンボリック相互作用論、エスノメソドロジーによって展開されてきた（船津 1995: 5)。本論では、後者の社会化のうち、「シンボリック相互作用論」(Symbolic Interactionism）による社会化論に依拠して論を展開していきたい。

第2節　第2次的社会化論としての準拠集団論

シンボリック相互作用論において、人間は、動物のように「刺激→反応」ではなく、自らが置かれた環境にシンボルを媒介にして間接的に関わる存在であると捉えられている（船津 2011: 194)。シンボルとは意味を担う記号である。あらゆるものに特定の意味が付与されれば、シンボルになりえる。シンボルの典型として、言語が挙げられる。また記念写真など行為者にとってシンボルとしての働きがある画像（アイコン（icon)）もシンボルの一つである。換言すれば、人間は自分自身を取り巻く環境に直接的にではなく、意味をはさんで間接的に関わる。そして、人間が置かれたその社会を構成するすべてのシンボルを「文化」という。文化には、言語のほかに、アイコンなど具体的な形のあるものと、慣習・習慣、価値・規範、その社会の成員による振る舞いや会話、相互行為の集積など具体的で明瞭な形のないものなどを含む「行動文化」(behavioral culture）がある。

すでに述べたように、人間は社会化されることによって、その社会の言語、価値や規範を学習し、その社会に適応する。この意味で、社会化とは文化を学ぶプロセスであるとも言える。この社会化のプロセスにおいては、さまざまな集団が関わっている。集団とは、メンバーに地位と役割が与えられ、相互行為が観察される人々の集まりのことである。第1次社会化に関わる集団は主に家族であり、第 2 次社会化に関わる集団には家族、学校や同輩集団、さまざまな組織体、メディア、職場などがある。人間の社会化は生涯にわたり続く。その社会化のプロセスにおいて様々な集団に接したり、属したりすることによって、その集団の成員と相互作用し、その集団の価値や規範を学習し、それらを選択的に自分自身の中に取り入れる。こうした過程を通じて、行為者によって解釈と修正された後のその集団の価値や規範（文化）が、その行為者にとって日々の生活を送る中での当たりまえのもの（自明視されているもの）となり、行動指針となる。ここで述べている行為者によって自明視されている価値や規範を、シンボリック相互作用論においては「パースペクティブ」という。社会化のプロセスにおいて、そのパースペクティブが行為者の準拠枠を構成する集団、言いかえれば行為者によってそのパースペクティブが自明視されている集団が準拠集団であるとシブタニ（Tamotsu Shibutani）は主張している（Shibutani 1995＝2013: 5)。

後述するように、シンボリック相互作用論の社会化論は、人間を主体的な存在と捉える発想をその根底に持っている。人間はある特定の環境（社会）に適応しようとする。その際に、その環境（社会）からある一定のパースペクティブを獲得する。その環境（社会）がその行為者にとって準拠集団となる。準拠集団から獲得したパースペクティブを通して、その環境（社会）に存在する他者たちと社会的相互作用を行い、同時に自分自身とも相互

作用を行う。人間とは、この二つの相互作用のなかでその適応を達成しようとする存在である。シンボリック相互作用論において、社会化のプロセスの中で行為者がどの集団を準拠集団としているのかという問題が非常に重要なものとなる。

本研究の目的は、中国人による日本社会への適応過程を解明することにある。この過程を解明するに際して、本論は、中国人留学生及び元留学生の鹿児島社会への適応過程に焦点を当てている。本論では、この適応過程を、第2次社会化の一種として捉える。

本論は、上記の意味での第 2 次社会化を捉える有効な視角として、シンボリック相互作用論の準拠集団論に着目している。シンボリック相互作用論において準拠集団論を展開した古典的な論考に、シブタニの「パースペクティブとしての準拠集団」(Shibutani 1955=2013）がある。シブタニによれば、人間が自分を取り巻く絶えず変化している環境を、比較的に安定したもの、秩序立ったもの、予測可能なものとして捉えられるか否かは、自分自身の中で組織化されたパースペクティブに依存する。このような組織されたパースペクティブは「人間は各々自らの集団が有する文化の観点から自らの世界に働きかける」(Shibutani 1955=2013: 7）ことによって作られていく。言いかえれば、人間は、自分が関与または参与している集団の分有されたパースペクティブ（文化）を選択的に自分自身の中に取り入れ、それに基づいて「知覚し、思考し、種々の判断を下し」、「自己統制」(self control）する（Shibutani 1955＝2013: 7)。このようなプロセスによって、関与または参与しているある集団の分有されたパースペクティブが、その行為者によって自明視されたものとなり、準拠枠となる。人間は自分自身、他者、そして自分を取り巻く環境のすべての事柄をこの準拠枠に基づいて、定義し、「トランスアクション」(transaction）に参与する(Shibutani 1955=2013: 7)。トランスアクションとは、自分を取り巻く環境とその環境にいる他者との相互作用を意味する。たとえ自分を取り巻く環境が突然変わったとしても、人間はもともと自分を取り巻く環境から取り入れたパースペクティブを準拠枠として、依然としてその変化した環境に向ける傾向がある。そのため、初めて海外に行った人は自分の見慣れない事柄について間違った解釈をしたり、カルチャーショックを受けたりすることになる。その環境の変化が一時的ではなく、長期的な場合は、人間は変化した環境に適応しようとする。その際に、変化した環境の他者（集団）と関わり、もう一度「自己統制」することによって、新たな組織されたパースペクティブを獲得することになる。その新たに組織されたパースペクティブは、その行為者にとって変化した環境に対する適応指針となる（Shibutani 1955=2013: 7)。

上記のシブタニの見解は、シンボリック相互作用論の提唱者であるブルーマー（Herbert George Blumer）の社会化論とも符合する（Kuwabara and Yamaguchi 2013: 116)。ブルーマーはシンボリック相互作用論について三つの前提を提起している（Blumer 1969=1991: 2)。

1)　人間は、ものごとが自分に対して持つ意味にのっとって、そのものごとに対して行為する。

2)　このようなものごとの意味は、個人がその仲間と一緒に参加する社会的相互作用から導き出され、発生する。
3)　このようなの意味は、個人が、自分の出会ったものごとに対処する中で、その個人が用いる解釈の過程によって扱われたり、修正されたりする。

ここでの「ものごとが自分に対して持つ意味」とはシブタニの「行為者によって自明視されたパースペクティブ」と同じ意味であり、またブルーマーの第二の前提は、そのようなパースペクティブが他者との相互作用を行う過程（トランスアクション）から取得される、とするシブタニの見解と等価である。さらに、ブルーマーが第三の前提で述べている「解釈の過程」＝「自分自身との相互作用」はシブタニのいう「自己統制」と同義である（桑原・奥田 2009)。桑原ほか（Kuwabara and Yamaguchi 2013: 116-117）によれば、ブルーマーにおいて社会化とは、人間が、自らが適応しようとする「他者たちの集団」（groups of others）から「定義の諸図式」（schemes of definition）と「一般化された諸々の役割」（generalized roles）という二つの「パースペクティブ」（perspective）を取得し、この二つのパースペクティブに自らの相互作用を方向つけられる過程と捉えられている。

上記のブルーマーの社会化論は、日本の体表的なシンボリック相互作用論の論客である船津衛によっても踏まえられている。船津はミードの見解を踏まえ、人間の自我は「主我」と「客我」の二つの側面に分けられると主張し、「主我」（I）は人間の主体性を指し、「客我」（me）は自我の社会性を表していると述べている。後者の「客我」は、人間が他者の期待を受け入れることによって形作る側面であると船津は解説している（船津 2011: 188)。「主我」は人間の主体性を表し、自我の積極的な側面を示している。人間の個性や独自性、創造性を示している。人間は「主我」を有することによって、新しいものを創発する能力を持つ。「主我」は人間の創発的内省性を表すものと考えることができる、と船津は述べている（船津 2011: 191)。彼がここで述べている創発とは、新しいものを生み出す意味で、内省は人間が自分の内側を振り返ることである。このような「創発的内省」は行為者が一人で何かを考えることによって新しさを生み出すということではない。それには、他者との相互作用が欠かせない。人間は「意味のあるシンボル」（significant symbol）の使用によって、他者とのコミュニケーション（他者との相互作用）において、同時並行で自己とのコミュニケーション（自分自身との相互作用）を行う。自己とのコミュニケーション（自分自身との相互作用）とは、内的コミュニケーションを意味し、他者とのコミュニケーション（他者との相互作用）は、外的コミュニケーションを意味する。内的コミュニケーションを行うことによって、他者の期待の修正や再構成が行われ、他者との関係が再構成され、新たな行為が可能となる。「客我」は他者の期待を取り入れることを通じて形づくられていく（船津　2011:188)。自我が他者の期待を取り入れることを「役割取得」（role-taking）という。しかし、他者は一人ではなく、複数存在している。空間的にも、時間的にも広げられた他者の期待は常に調和しているわけではなく、そこにズレや対立が生じる場合も少

なくない。そこで、複数の期待がまとめられ、組織化され、一般化され、「一般化された他者」（generalized other）の期待が形づくられる（船津　2011: 51-57)。このように社会化のプロセスは「主我」と「客我」の相互作用において進行していく。

第３節　準拠集団論のバリエーションと「パースペクティブとしての準拠集団」

ここまでの議論でシンボリック相互作用論の提唱者であるハーバード・ブルーマー、その直弟子にあたるタモツ・シブタニ、日本の代表的論客である船津衛、この三者の社会化論における基本的な観点とその三者の議論の関連性について簡単にまとめた。本研究では、シンボリック相互作用論の中でも、シンボリック相互作用論の準拠集団論に着目しているタモツ・シブタニの「パースペクティブとしての準拠集団」に依拠しながら、さらに準拠集団論に関するシブタニの観点を整理していく。

シブタニによれば、「準拠集団概念は社会心理学において主要な分析ツールの一つ」であり、研究者たちによって幅広く使われている（Shibutani 1995=2013: 3)。彼は準拠集団概念に言及するときに、言及対象となるものを三つに分類している。「比較点として機能する集団」、「人々が〔種々の意味で〕それに対して野心を抱く集団」、「行為者によってそのパースペクティブが自明視されている集団」である。この三つの言及対象は「行為者によって認識可能な集団と、その集団において分有されている規範と価値とに言及」している点では共通しているが、類的に異なったものであるため、その使われ方に混乱が生じている。シブタニは準拠集団という言葉を「行為者によってそのパースペクティブが自明視されている集団」（そのパースペクティブが行為者の準拠枠を構成する集団）に限定して用いるべきだと主張している（Shibutani 1995=2013: 3-5)。

第１項　準拠集団の二つの機能

「準拠集団」という言葉は、必ず「パースペクティブ」というキーワードとセットで使われている。パースペクティブとは「人間の、自らの世界に関する体系化されたものの見方である。すなわち、種々の対象の属性、出来事の属性、人間性に関する種々の属性について自明視されていることである」（Shibutani 1955=2013: 5-6)。では、「準拠集団」と「パースペクティブ」とはどのような関係にあるのだろうか。シブタニにとって、準拠集団は「パースペクティブの獲得源」であると同時に、「行為の試金石」という機能を持っている（桑原・奥田 2006: 6)。

準拠集団の「パースペクティブの獲得源」という機能については、すでに前節で述べた通りである。すなわち、「ある集団に参与したり、関与したり」することによって、その集団の分有されたパースペクティブが自分自身の中に取り入れられ、自分自身の組織化されたパースペクティブになるということである。人間は組織化されたパースペクティブに基づいて、「知覚し、思考し、種々の判断を下し、自らを統制する」（Shibutani 1955=2013: 7)。異なったパースペクティブを持つ人間は同じ環境に直面するときに、異なる事柄に目を向

けることになる。また同じ状況を別様に解釈し、異なる反応を示す。自分を取り巻く環境のすべての事柄をこのパースペクティブを通して定義しているため、絶えず変化している世界を「比較的安定したものとして、秩序立ったものとして、そして予測可能なものとして」捉えることができる（Shibutani 1955=2013: 6)。人間が自分を取り巻く環境の中で以前に見落としていた事柄に気づくようになる、もしくは自分を取り巻く環境を異なった観点から見るようになる場合があるとすれば、その人の組織化されたパースペクティブに変化が生じたということである。

人間にとってのパースペクティブは「実際に知覚された諸事象の体系であると同時に、想起されたり、予期されたりした諸事象の体系でもある。何があり得て何が可能かに関する組織化された認識のことである」(Shibutani 1955=2013: 6)。そのため、人間は組織されたパースペクティブに基づいて、他者の行動を予期したり、自分の行動を抑制したりする。そのような予期と抑制した結果を、自分が準拠集団としている集団に属している他者の反応から確認する。それが肯定的な場合は、そのパースペクティブはより強固なものとなっていく。それが否定的な場合は、行為者は戸惑い、もしくは自分の行動の修正を試みることになるだろう。これが準拠集団の「行為の試金石」という機能が意味する内容である（Shibutani 1955=2013: 6-7)。

第２項　準拠集団理論からみる人々のトランスアクション

同じ集団を準拠集団としている人々はパースペクティブを分有している。そのような分有されたパースペクティブはその集団の文化である。ある集団に分有されたパースペクティブ（文化）の観点を持っているその集団の成員は、皆「共通のやり方の行為に従事する」ことになる（Shibutani 1955=2013: 6)。集合的なトランスアクションに参与するときに、人々は、分有されたパースペクティブに基づいてお互いに相手の行動を予期し、お互いのパースペクティブを確認し合い、お互いに相手のパースペクティブを支持しあっている。予期されたことが実現されときに、分有されたパースペクティブ（文化）は確認され、より強固なものになっていく。このように、文化とは、「コミュニケーションの所産」であり、「静態的な実体ではなく持続的な過程」である（Shibutani 1955=2013: 6-7)。

では、異なったパースペクティブをもつ人々はどのようにして共同行為を行うことができるのだろうか。シブタニは彼らが「一般化された他者」(generalized other）の役割を取得しているからだという説明をしている。「一般化された他者の役割を取得すること」とは、「人々が各々自らの集団が有する文化の観点から自らの世界に働きかける」ことである（Shibutani 1955=2013: 6)。人間は自分が参与もしくは関与している準拠集団の観点から自分に働きかける。同時に同じ集団に属している他の成員は自分と同じようなパースペクティブを持っていると考える。また、自分は他の成員が自分と同じようなパースペクティブを持っていると考えていることを、他の成員も了解している、と考える。そのため、他者のこれからの行動の方向性を予期することができる。また望ましくない自分の行動を抑

制することもできる。人間のパースペクティブは、「いつでも他者たちの種々の予期を考慮に入れている」とシブタニは述べている（Shibutani 1955=2013: 7)。

また、人間の行動に一貫性があるように見えるのも、人間が常に組織化されたパースペクティブに基づいて定義し、行動しているからである。「いったん人間がその集団から特定の見地を取り入れると、それはその人の世界に対する適応方針となり、その人はこの準拠枠をあらゆる未知の状況に向けることになる」とシブタニは述べている（Shibutani 1955=2013: 7)。それがゆえに、初めて海外に行った人は、海外の事柄を依然として自分の文化の観点から定義し、見慣れない事柄を間違って解釈をしたり、カルチャーショックを受けたりする。

第３項　現代社会における準拠集団理論の必要性及び準拠集団となり得る集団

「過去十年の間に突然に準拠集団理論に関心が寄せられるようになった」原因は大衆社会の独自性にあるとシブタニは述べている（Shibutani 1955=2013: 7)。すなわち、近代大衆社会において、個人は自分が成員と見なされていない集団、直接参与していない集団、時には実際に存在していない集団（想像上の集団など）を準拠集団にしていることがある。また、近代大衆社会において、文化の多元化や多様化により、個人は多様な集団に接することが増え、各々複数の様々なパースペクティブを内面化していて、時に個々人にジレンマをもたらすこともある（Shibutani 1955=2013: 8)。

シブタニは準拠集団という言葉に言及している時に、対象となっているものは三つあると主張している。①直接参与している集団、つまり所属集団である。ほとんどの人にとって最も重要な集団である。主に「第一次的関係にある多くの人々から構成される集団である」(Shibutani 1955=2013: 8)。②社会的カテゴリー、すなわち「社会階級であったり、エスニック・グループであったり、既存のコミュニティに所属している人々であったり、果ては、何らかの特別な利害に関心を持っている人々」であったりする。③想像上の集団、たとえば、前衛の芸術家たち、科学者たち、「古きよき時代」を思いながら生きている人たちなどは未来あるいは過去の存在していない、想像上の集団を準拠集団にしている。

第４項　シブタニの社会観

パースペクティブの獲得において、コミュニケーション・チャンネルが極めて重要である。「共通のパースペクティブ―共通の文化」は、「共通のコミュニケーション・チャンネルに参与することを通じて生まれる」(Shibutani 1955=2013: 8)。それと同様に、異なるパースペクティブ（文化）をもつ人々は必ず異なるコミュニケーション・チャンネルに接触している。異なる社会階級の人々が異なる生活様式と見地を持つのも、経済的地位によるからではなく、異なるコミュニケーション・チャンネルに接触しているからである。シブタニによれば、「見地の多様性は、分化した接触と結びつき」から生じる（Shibutani 1955=2013: 9)。「社会的距離の維持―凝離、コンフリクト、異なる文献を読む」ことを通

じて、種々の独自の文化が形成されていく。部外者から距離を置いた状態を維持するために、しばしばその成員は意識的にも無意識的にもコミュニケーション・チャンネルを制限したり制限されたりすることになる。

近代大衆社会の文化の多元化と多様化は、「数多くのコミュニケーション・チャンネルや、それらに対する参与の容易さの所産である」とシブタニは述べている（Shibutani 1955=2013: 9)。近代大衆社会以前には、共通の文化は（地理的な）領域的基礎を持っていた。しかし、「高速輸送手段及びマスメディアの発達」により、共通の文化は（地理的な）領域的基礎を失い、（地理的な）領域的基礎と文化的な領域基礎が乖離してしまった。「文化領域はコミュニケーション・チャンネルと同一の広がりを持つ」ため、近代大衆社会の多様なコミュニケーション・チャンネルが地理的には散在している人々を同じ文化を持つ集団にさせ、また同じ地理的領域に住む人々が異なる文化を持つ状況を作り出した。文化的領域は、様々な社会的世界として生起することになった（Shibutani 1955=2013: 9)。社会的世界とは、「何らかのパースペクティブを共有している人々の集団であり、その集団が存在している場のことである」(桑原・奥田 2006: 14)。

近代大衆社会は、「気が遠くなるほど多様な社会的世界から構成されている」とシブタニは述べている。シブタニは一体感と連帯感を基準にして、多様な社会的世界を三つに分類している。①コミュニティ的構造の集団、すなわち一体感と連帯感が最も強く、排他性が強く、高度な忠誠を要する集団である。たとえば、「犯罪社会、エスニック・マイノリティ、社会的エリート集団である」。②アソシエーション的構造の集団、たとえば、「医学会、労働組合の世界、演劇界、高級ナイトクラブの常連たちの世界」である。③緩やかに結びつきあった特別な関心に基づく社会的世界、たとえば、「スポーツの世界、切手収集家の世界、昼ドラの世界」である（Shibutani 1955=2013: 10)。

社会的世界は、決して「静態的実体」ではなく、「コミュニケーション・チャンネルの確立をもって〔はじめて〕成立する」(Shibutani 1955=2013: 10)。そのため、生活状況が変化すれば、接触できるコミュニケーション・チャンネルも変化する。それによって、その内部に属している人々のパースペクティブも変化し得る。分有されたパースペクティブ（文化）は絶えず再構成され、その結果、社会的関係が変化した場合、社会的世界が消滅する場合もある（Shibutani 1955=2013: 10-11)。時にある社会的世界は部外者との距離を増大させるために、その世界の特有の言語、隠語、世界観、価値観、出世の路線において独自のシステムを発達させている（Shibutani 1955=2013: 11)。

多様なコミュニケーション・チャンネルがあることとそれらに参与することの容易さのため、個人はいくつかのパースペクティブを内面化し、いくつかの社会的世界に同時に属している。人によって、その社会的世界の組み合わせも異なる。シブタニは個人と社会的世界の関係を説明するときに、幾何学の類比を使っている。「個人は各々、複数の社会圏の独自の組み合わせが交差する、その点に立っている」(Shibutani 1955=2013: 11)。

第5項　準拠集団と忠誠の問題

近代大衆社会の人間は複数の社会的世界に属している。無数なパースペクティブを内面化している個々人は、そのようなパースペクティブが支持しあっている状況もあれば、コンフリクトや不調和の状況が生じている場合もある。社会的世界が異なれば、トランスアクションに参与する際に自らが基づくパースペクティブも変化する。そのため、違った場面において、個人は違ったパーソナリティの側面を見せている可能性もあるが、そのようなトランスアクションが離れた文脈で起きている場合、そのことが気づかれることはほとんどない。また大半の人はこのように「コンパーメント化」された生活を送るなか、そのパースペクティブが調和している限り、自分をなんとか合理的で一貫性のある人間として捉えようとする。しかし、そのようなパースペクティブが不調和またはコンフリクトを起こしている場合、時に同じ状況において、パースペクティブの二者択一の選択に迫られ、個人は葛藤経験に陥ることになる。多くの場合、それは一時的であるが、統合性の低い社会にいる人々や「マージナル・マン」は長い間絶えずそのような葛藤経験に悩まされることになる。

パースペクティブがコンフリクトまたは不調和を引き起こしている場合に、行為者はしばしば準拠集団の選択に直面する。準拠集団の選択は「個人の対人関係の関数」であるとシブタニが述べたように（Shibutani 1955=2013: 12)、個人がある集団にどの程度忠誠的であるか、二者択一の場合にその集団を準拠集団に選択するかどうかということは、個人のその集団に属している他者との関係に依存している。その中でも「重要な他者」との関係が極めて重要である（Shibutani 1955=2013=13)。その集団に属している他者との関係が良好であればあるほど、その集団に対する忠誠心も高くなる可能性がある。また、その集団を準拠集団に選択する可能性も高くなる。同様に、重要な他者が、愛情や思慮を持って、自分を扱ってくれる場合には、忠誠心を示す可能性も高く、それが逆の場合には、個人は忠誠心を示すどころか、重要な他者の予期を十分に把握しているにもかかわらず、わざとその期待に背くようなことをすることもある（Shibutani 1955=2013: 13)。

第4節　パースペクティブとしての準拠集団論からみた中国文化と日本文化

前節ではシブタニの準拠集団論に関する観点を整理した。では準拠集団は、中国人が実際に日本社会へ適応する過程の中でどう関連してくるのだろうか。前節で整理したシブタニの準拠集団論に関する観点を踏まえて考察していく。

第1項　準拠集団の二つの機能

準拠集団は、「パースペクティブの獲得源」と「行為の試金石」という二つの機能を持っているとシブタニは主張している（桑原・奥田 2006: 6)。

「パースペクティブの獲得源」という機能において、中国人と日本人は、それぞれ中国社会と日本社会のトランスアクションに参与することによって、自国の分有されたパースペ